

再考 「真理のことば」

月夜の龍

# 目次

## 第1節 さまざまな事

FS1 心	4
FS2 自己	5
FS3 はげみ	6
FS4 老いること	7
FS5 世の中	9
FS6 道	10
FS7 千という数にちなんで	12
FS8 花にちなんで	13
FS9 楽しみ	15
FS10 やまぢやまなこと	16
FS11 象	18
FS12 ひご組ずし	19

## 第2節 さまざまな悪

FS13 悪	22
FS14 怒り	23

FS15	汚れ	25
FS16	執着と欲望	27
FS17	悪いところ	30
<b>第3節 さまざまな人</b>		
FS18	愚かな人	32
FS19	賢い人	34
FS20	真人	36
FS21	道を実践する人	38
FS22	仏弟子	40
FS23	修行僧	41
FS24	バラモン	44
FS25	ブツダ	46

## 第1節 さまざまな事

### F001 ♪

F001 心は動揺し、ざわめき、護り難く、制し難い。英知ある人はこれを直くする——弓師が矢の弦を直くするように。

F002 水の中（靈界）の住処から引き出されて陸「おか」の上（この世）に投げ捨てられた魚のように、この心は、悪魔の支配から逃れようとしてもがきまわる。

F003 意は、顕在的で、軽々（かるがる）とざわめき、欲するがままにおもむき捉え難い。心は、この顕在的な意と、極めて見難く微妙な潜在部から成る。

F004 悪魔は、この心の支配を狙う。心を悪魔から守らなければ、安楽は得られない。心を正しく治めれば安楽を得る。

F005 心は独りで動きまわり、遠くに行ってしまう顕在部がある。また、形体なく、胸の奥の洞窟（心臓）にひそんでいる潜在部もある。これら心を治める人々は、死の束縛から逃れるであろう。

F006 正しい真理を知らず、信念が汚されたならば、心の安楽（安住）は得られず、さどりの智慧は湧いてこない。

- F007 心が煩惱に汚されず、念いが乱れずに、善悪のはからいを捨てるに至った真人（覚醒者）は、何も恐れることが無い。
- F008 ああ、この身はまもなく地上によこたわるであろう。魂は抜け、水瓶の破片のように無用になる。身体は、このように脆いものだと思って、身体への執着を離れよ。
- F009 心を正しく治めて、智慧の武器を持ち悪魔と戦え。そして執着することなく、勝ち得たものを守れ。
- F010 憎む人が憎む人にたいし、怨む人が怨む人にたいして、どのようなことをしようとも、邪なことをめざしている心はそれよりもひどいことをする。
- F011 母も父もその他親族がしてくれるよりもさらに優れたことを、正しく向けられた心がしてくれる。

FS2 卍卍

- F012 魂（自己）こそ心（自分）の主である。他人がどうして心（自分）の主であろうか？ 魂（自己）をよく整えたならば、得難き主を得る。
- F013 もしも人が魂（自己）を愛しいものと知るならば、心（自分）をよく守れ。賢い人は、怠らずに励み、常に心を治め、つつしんで目ざめているようにせよ。
- F014 心が作り、心から生じ、心から起った悪が智慧悪しき人を打ちくたく。――金剛石が宝石を打ちくたくように。
- F015 愚かな人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、自己（魂）に対してなす。――蔓草（ツルクサ）が沙羅の木にまといつくように。

F016 先ず自己を正しく整えてから、次いで他人に教えよ。そうすれば賢明な人は、煩わされて悩むことが無いであろう。

F017 愚かにも、悪い見解にもとづいて、真理に従って生きるブツダ・真人たちの教えを罵るならば、その人は悪い報いが熟する。——カッタカという草は果実が熟すると自分自身に滅びてしまうように。

F018 善からぬこと、自己のためにならぬことは、なし易い。ためになること、善いことは、実に極めてなし難い。

F019 自ら悪をなすならば、自ら汚れ、自ら悪をなさないならば、自ら浄まる。浄いのも浄くないのも、各自のことである。人は他人を浄めることができない。

F020 たとい他人にとっていかに大事であろうとも、(自分ではない)他人の目的のために自己のつとめをすて去ってはならぬ。自己の目的を熟知して、自己のつとめに専念せよ。

### FS3 はげみ

F021 努め励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境地である。

努め励む人々は死ぬことがない。怠りなまける人々は、死者のごとくである。

F022 このようにはつきりと知って、努め励むことをよく知る人々は、努め励むことを喜び、真人(覚醒者)たちの明るく生き生きとした生活を樂しむ。

F023 真理に従う道を進むよう努め励み、堪え忍ぶこと強く、思慮ある人々は、安らぎに達する。

これは無上の幸せである。

F024 心は奮起し、思いつつましく、行いは清く、気をつけて行動し、自ら制し、法(のり)に

したがって生き、努め励む人は、名声が高まる。

F025 思慮ある人は、怠らず、努め励み、心を治め、執着と怒りと迷妄に打ち勝て。それにより、欲望による激流に押し流されない心の拠り所（魂）を作れ。

F026 智慧乏しき愚かな人々は怠惰になじむ。

しかし賢い人は、最上の財宝（たから）を守るように、努め励むのを守る。

F027 怠たらず、執着と歓楽に親まらずに、思念をこらす者は、大いなる楽しみを得る。

F028 人は怠惰を退け、努め励むことにより、智慧を得て、憂いをなくす。

山上にいる人が地上の人々を見下ろすように、その人は憂いを持つ他の多くの人々を、自分とは異なると、はっきりと見極める。

F029 怠りなまけている人々の中で、一人でも努め励み、そして、眠っている人々の中で、ひとりよく目覚めている思慮ある人は、足のろの馬を抜いて疾く走る馬のようなものである。

F030 努め励む事は常に褒め称えられる。放逸なることは常に非難される。

マガヴァー（インドラ神）は、努め励んだので、神々の中での最高の者となった。

F031 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、微細なものでも粗大なものでも心のわずらいを、焼きつくしながら生活する。

F032 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、墮落するはずはなく、すでに安らぎ（ニルヴァーナ）の近くにいる。

#### FS4 老うなりや

7 F033 何の笑いがあろうか。何の歡びがあろうか？ ——世間は常に燃え立っているのに——。汝らは暗黒に覆われている。どうして燈明を求めないのか？

- F034 見よ、粉飾された形体を！（それは）傷だらけの身体であって、いろいろのものが集まっただけである。病いに悩み、意欲ばかり多くて、堅固でなく、安住していない。
- F035 この容色は衰えはてた。病いの巢であり、脆くも滅びる。腐敗のかたまりで、やぶれてしまう。生命は死に帰着する。
- F036 牛飼いが棒をもって牛どもを牧場に駆り立てるように、老いと死とは生きとし生けるものどもの寿命を駆り立てる。
- F037 秋に投げすてられた瓢箪（ひょうたん）のような、鳩の色のようなこの白い骨を見ては、なんの快さがあるうか？
- F038 骨で城がつくられ、それに肉と血とが塗ってあり、老いと死と高ぶりとごまかしとがおさめられている。
- F039 いとも麗しい国王の車も朽ちてしまう。身体もまた老いに近づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いに道理を説き聞かせる。
- F040 学ぶことの少ない人は、牛のように老いる。その人の肉は増えるが、その人の知恵は増えない。
- F041 わたくしは幾多の生涯にわたって生死の流れを無益に経めぐって来た、——家屋の作者（ツクリテ）をさがしもとめて——。あの生涯、この生涯とくりかえすのは苦しいことである。
- F042 家屋の作者よ！ 汝の正体は見られてしまった。心は、妄執を滅ぼし尽くし（身体の）形成作用を離れたので、汝（心）はもはや家屋を作ることはないであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は壊れてしまった。
- F043 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、魚のいなくなつた

池にいる白鷺のように、痩せて滅びてしまう。

F044 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、昔のことばかり思い出して、かたくなな心となって、壊れた弓のように横たわる。

#### F55 卅六中

F045 下劣なしかたになじむな。怠けてふわふわと暮らすな。邪な見解をいだくな。世俗のわずらいをふやすな。

F046 奮起（フルイタ）てよ。怠けてはならぬ。道理に従った善い行ないを實行せよ。道理に従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す。

F047 道理に従った善い行ないを實行せよ。道理に従わない悪い行ないを實行するな。道理に従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す。

F048 世の中の実相と泡沫を見よ。泡沫はかげろうのごとしと見よ。世の中をこのように観ずる人は、死王もかれを見ることがない。

F049 さあ、この世の中を見よ。王者の車のように美麗な部分が目立つ。愚かな人はそこに耽溺（たんでき）するが、賢い人はそれに執着しない。

F050 以前は怠りなまけていた人でも、のちに怠りなまけることが無いなら、その人はこの世の中を照らす。―あたかも、雲を離れた月のように。

F051 以前には悪い行ないをした人でも、のちに善によってつぐなうならば、その人はこの世の中を照らす。―あたかも、雲を離れた月のように。

F052 この世の中は暗黒である。ここではっきりと理（コトワリ）と実相を見分ける人は少ない。しかし、これらを見分けたならば、悪魔とその軍勢にうち勝つ。あたかも、網から

脱れた鳥のように。

F053 網から脱れた鳥のような真人は、あるものは白鳥のように太陽の道を行き、あるものは神通により虚空を行き、あるものはブツダとなる。

F054 唯一無二の真理を逸脱し、偽りを語り、安らぎの世界を無視している人は、どんな悪でもなす。

F055 愚かな人々は分かちあうことをたたえない。しかし賢い人々は分かちあうことを喜ぶ。

F056 大地の唯一の支配者となるよりも、全世界の主権者となるよりも、真人となるほうがすぐれている。

### F56 道

F057 人の道のうちでは、仏道の八正道が最もすぐれている。

もろもろの真理のうちでは、四諦（苦・集・滅・道）が最上である。もろもろの徳の中では、執着から離れることが最もすぐれている。人々のうちでは、ブツダ（＝眼ある人）が最もすぐれている。

F058 これこそ道である。（真理を）見るはたらきを清めるためには、この他に道は無い。汝らはこの道を実践せよ。これこそ悪魔を迷わして（打ちひしぐ）ものである。

F059 汝らがこの道を行くならば、苦しみをなくすことができるであろう。（棘が肉に刺さったので）矢を抜いて癒す方法を知って、わたくしは汝らにこの道を説いたのだ。

F060 汝らは自ら努めよ。もろもろの修行完成者は（ただ）教えを説くだけである。心をおさめて、この道を歩む者は、悪魔の束縛から脱れるであろう。

F061 「一切の形成されたものは無常である。」（諸行無常）

「一切の形成されたものは苦しみである。」（一切皆苦）

「一切の事物は我ならざるものである。」（諸法非我）

と明らかな知慧をもつてこの世の全てを觀るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかなになる道である。

F062 起きるべき時に起きないで、若くて力があるのに怠りなまけていて、意志も思考も薄弱で、怠惰で物憂い人は、明らかな知慧によって道を見出すことがない。

F063 言葉を慎しみ、心を落ち着けて慎しみ、身に悪を為してはならない。これらの三つの行ないの路を淨くたもつならば、ブツダの説きたもうた道を克ち得るであろう。

F064 実に心が統一されたならば、豊かな知慧が生じる。心が統一されないならば、豊かな知慧がほろびる。生じることとほろびることとの、この二種の道を知って、豊かな知慧が生ずるように自己を整えよ。

F065 一つの樹を伐るのではなくて、（煩惱の）林を伐れ。危険は林から生じる。（煩惱の）林とその下生えとを切つて、林から脱れた者となれ。修行僧らよ。

F066 たとい僅かであろうとも、男女の淫らな欲望が断たれないあいだは、その人の心は束縛されている。

F067 自己の執着を断ち切れ、――池の水の上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を選び進め。めでたく行きし人であるブツダは安らぎへの道を説きたもうた。

F068 「わたしは雨期にはここに住もう。冬と夏とにはここに住もう」と愚者はこのようによくよと慮つて、死が迫って来るのに気がつかない。

F069 子どもや家畜のことに気を奪われて心がそれに執着している人を、死はさらって行く。――

―眠っている村を大洪水が押し流すように。

F070 子も救うことができない。父も親戚もまた救うことができない。死に捉えられた者を、親族も救い得る能力がない。

F071 賢い人はこの道理を知って、教えをまもり自らを清め、安らぎに至る仏道をすみやかに進め。

F57 千とごうの数にちなんで

F072 無益な語句を千たび語るよりも、聞いて心の静まる有益な語句を一つ聞く方が優れている。

F073 無益な語句よりなる詩が千もあつても、聞いて心の静まる詩を一つ聞く方が優れている。

F074 無益な語句よりなる詩を百も唱えるよりも、聞いて心の静まる詩を一つ聞く方が優れている。

F075 常に行ないをつつしみ、自己を整え、心を治めることは、自己にうち克つ事である。

自己に克つた者の勝利を敗北に転ずる事は、神も、ガンダルヴァ(天の伎楽神)も、悪魔も、梵天もなす事ができない。唯だ一つの自己に克つ者は勝利者となる。

この勝利者が、あまたの賤(いや)しい愚かな人々に打ち勝てば、その人は最上の勝利者となる。

F076 百年の間、月々千回ずつ祭祀(まつり)を営む人や、林の中で祭祀(まつり)の火につかえる人々がいる。もし、それらの人々が自己を修養した人(ブツダや真人)を尊び供養するなら、たとえその供養がつかの間であっても、ただ百年祭祀を営むだけよりも優れている。自己を修養した人を尊び供養することは優れている。

F077 功德を得るために、人がこの世で、一年間、神をまつり、犠牲(いけにえ)をささげ、あ

るいは火にささげ物をする。しかし、その全てをあわせても、ただ、行ないの正しい人々を尊ぶ真正なる祭りの方が、はるかに優れている。

F078 人が、常に、自己を修養した人（ブツダや真人）に敬礼を守れば、魂の寿命と美しさと楽しみと力が増大する。

F079 素行が悪く、心が乱れていて百年生きるよりは、徳行あり思い静かな人が一日生きる方が優れている。

F080 愚かに迷い、心の乱れている人が百年生きるよりは、知慧あり思い静かな人が一日生きる方が優れている。

F081 怠りなまけて、気力もなく百年生きるよりは、堅固につとめ励んで一日生きる方が優れている。

F082 物事が興り消え失せる因果を見極めずに百年生きるよりも、この因果を見極めて一日生きる方が優れている。

F083 魂の不死を見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

F084 四諦の真理を見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

FS8 花ごちなんで

F085 だれ（どの魂）がこの大地（心）を正しく治めるであろうか？

だれが閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを正しく治めるであろうか？

わざいに巧みな人が花を摘むように、善く説かれた真理のことばを摘み集めるのはだれであろうか？

13 F086 学び努める人こそ、この大地（心）を正しく治め、閻魔の世界と神々ともなるこの世

界とを正しく治めるであろう。

わざいに巧みな人が花を摘むように、学びつとめる人々こそ善く説かれた真理のことばを摘み集めるであろう。

F087 この身は泡沫（うたかた）のごとくであると知り、かげろうのようなはかない本性のものであるとさとり、そして悪魔に魅入られないよう、悪魔の花の矢を断ち切れ。

F088 花を摘むのに夢中になっている人を死がさらって行き、眠っている村を洪水が押し流す。花を摘むのに夢中になっている人が、未だ望みを果たさないうちに、死神（悪魔）が彼を征服する。

F089 蜜蜂は（花の）色香を害（そこなわず）に、汁をとって、花から飛び去る。

修行者が村に行くときは、そのようにせよ。

F090 他人のした事としなかった事を鑑みて、他人の過失から学び、良い行ないを実行せよ。

自分のした事としなかった事を省み、自己の過失はすみやかに改めよ。

F091 うるわしく、あでやかに咲く花でも、香りの無いものがあるように、善く説かれたことばでも、それを実行しない人には実りが無い。

F092 うるわしく、あでやかに咲く花で、しかも香りのあるものがあるように、善く説かれたことばも、それを実行する人には、実りがある。

F093 うず高い花を集めて多くの華鬘（はなかざり）をつくるように、人として生まれまた死ぬべきであるならば、多くの善いことをなせ。

F094 花の香りは風に逆らっては進んで行かない。梅檀（せんだん）もタガラの花もジャスミンもみなそうである。

しかし徳のある人の香りは、風に逆らっても進んで行く。徳のある人はすべての方向に

薫る。

F095 梅檀（センダン）、タガラ、青蓮華、ヴァツシキー——これら香りのあるものどものうちでも、徳行の香りこそ最上である。

F096 タガラ、梅檀（センダン）の香りは微かであって、大したことはない。しかし徳行のある人々の香りは最上であって、天の神々にもとどく。

F097 慎みを完成し、学び努めて生活し、正しい智慧によって解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。

F098 塵芥にも似た盲（めしい）た凡夫のあいだにあって、正しくめざめた真人は智慧により輝く。  
あたかも、大道に捨てられた塵芥（ちりあくた）の山堆（やまずみ）の中から香しく麗しい蓮華が生じ輝くように。

### FS9 楽しむ

F099 怨みをいだいている人々の間にあって、怨むこと無く、我らは暮らしていこう。

F100 悩める人々の間にあって、悩み無く暮らそう。

F101 貪っている人々の間にあって、患い無く、貪らないで暮らそう。

F102 久しく旅に出ていた人が遠方から無事に帰って来たならば、親戚・友人・親友たちは彼が帰って来たのを祝う。

F103 そのように善いことをしてこの世からあの世に行った人を善業が迎え受ける。——親族が愛する人が帰って来たのを迎え受けるように。

F104 欲望に等しい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、増悪に等しい不運は存在しない。

F105 このかりそめの身に等しい苦しみは存在しない。安らぎにまさる楽しみは存在しない。飢えは最大の病いであり、形成せられる存在(わが身)は最もひどい苦しみである。このことわりをあるがままに知ったならば、ニルヴァーナという最上の楽しみがあることを知るであろう。

F106 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の親族であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである。

F107 心を落ち着けて孤独の味を味わい、重ねて、禅定により真理と智慧の味を味わうならば、恐れがなくなっていく。

F108 もろもろのブツダ・真人に会うのは善いことである。愚かなる者どもに会わないならば、心はつねに楽しいであろう。

F109 愚人とともに歩む人は長い道のりにわたって憂いがある。愚人と共に住むのは、常に辛いことである。——仇敵とともに住むように。賢い人と共に住むのは楽しい。——親族に会うように。

F110 よく気をつけていて、明らかに智慧あり、学ぶところ多く、忍耐づよく、真理を護る、そのような立派なブツダ・真人に親しめよ。

#### FS10 やまやまなひん

F111 つまらぬ快樂を捨てることによって、広大なる楽しみを得ることができるのなら、賢い人は広大な楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。

- F112 他人を苦しめることによって自分の快樂を求める人は愚かな人であつて、怨みの絆にま  
つわれて、怨みから免れることができない。
- F113 なすべきことを、なおざりにし、なすべからざることをなす、遊びたわむれ放逸なる愚  
かな者どもには、汚れが増す。
- F114 常に身体(の本性)を思い続けて、為すべからざることを為さず、為すべきことを常に為  
して、心がけて、自ら気をつけている賢い人々には、もろもろの汚れがなくなる。
- F115 在家の生活は困難であり、家に住むのも難しい。なぜならば、心を同じくしない人々と  
共に住むのは難しいからである。
- 出家の生活も困難であり、それを楽しむことは難しい。出家者が策を弄して利益を求め  
ると、苦しみに遇う。だから、出家者は、策を弄して利益を求めてはならない。
- F116 出家者は、林の中で、ひとり坐し、ひとり臥し、ひとり歩もうとも、なおざりになるこ  
となく、自己を整えることを樂しめ。
- F117 徳行と見識とをそなえ、法にしたがつて生き、眞実を語り、自分のなすべきことを行な  
う人は、人々から愛される。
- F118 信仰あり、徳行そなわり、名声と繁榮を受けている人は、いかなる地方におもむこうと  
も、そこで尊ばれる。
- F119 善き人々は遠くにいても輝く、――雪を頂く高山のように。  
善からぬ人々は近くにいても見えない、――夜陰に放たれた矢のように。

F120 戦場の象が、射られた矢にあたっても堪え忍ぶように、われらは人のそしりを忍ぼう。多くの人は実に性質(たち)が悪いからである。

F121 世のそしりを忍び、心をおさめた者は、人々の中にあっても最上の者となる。馴らされた象が、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものとなり、最上の象となるように。

F122 馴らされた騾馬は良い。インダス河のほとりの血統よき馬も良い。クンジャラという名の大きな象も良い。しかし自己を整え正しく心を治めた人は、これらよりもすぐれている。なぜならば、これらの乗物(身分、血統や財)によって、未到の地(ニルヴァーナ)に行くことはできない。そこへは、自己を整え正しく心を治めた人がおもむく。

F123 「財を守る者」という汚れに染まった心は、いかんとも制し難く、かたくなに真理を拒む。この心は、執着を慕っている。あたかも、捕らえられても、一口の食物も食わず、こめかみから液汁をしたたらせて強暴になっている発情期の象が象の林を慕うように。

F124 大食いをして、眠りをこのみ、ころげまわって寝て、まどろんでいる愚鈍な人は、大きな豚のように糧を食べて肥り、くりかえし母胎に入って(迷いの生存をつづける)。

F125 この心は、以前には、望むがままに、欲するがままに、快きがままに、さすらっていた。今やわたくしはその心をすっかり抑制しよう、——象使いが鉤をもって、発情期に狂う象を全くおさえつけるように。

F126 心は泥沼に落ち込んだ象のようである。だから、努め励むのを楽しめ。おのれの心を護れ。自己を難処から救い出せ。

F127 もしも思慮深く聡明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができなれば、あらゆる危険困難に打ち克って、こころ喜び、念いをおちつけて、ともに歩め。

F128 しかし、もしも思慮深く聡明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができないならば、国を捨てた国王のように、また林の中の象のように、ひとり歩め。

F129 愚かな者を道連れとするな。それなら独りで行くほうがよい。  
悪いことをするな。

求めるところは少なくあれ。  
——林の中にいる象のように。

F130 (大きかろうとも、小さかろうとも)、どんな果報にも満足するのは楽しい。  
善いことをしておけば、命の終るときに楽しい。  
(悪いことをしなかったので)、あらゆる苦しみ(の報い)を除くことは楽しい。

F131 世に父を敬うことは楽しい。また母を敬うことは楽しい。世にブツダや真人を敬うことは楽しい。天下に正しい道があるのは楽しい。

F132 老いた日に至るまで慎みをたもつことは楽しい。信仰が確立していることは楽しい。明らかな知恵を体得することは楽しい。もろもろの悪事をなさないことは楽しい。

#### FS12 つづ組つづ

F133 ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によって作り出される。もしも、汚れた心で話したり行ったりするならば、苦しみはその人に付き従う。

——車をひく(牛)の足跡に車輪がついてゆくように

F134 ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によって作り出される。もしも清らかな心で話したり行ったりするならば、福樂はその人に付き従う。

——影がそのからだから離れないように。

F135 「彼はわれを罵った。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝った。彼はわれから強奪した。」という思いを抱く人には、怨みはついに息（や）むことがない。

F136 「彼はわれを罵った。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝った。彼はわれから強奪した。」という思いを抱かない人には、ついに怨みが息（や）む。

F137 実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息（や）むことがない。

怨みを離れてこそ息（や）む。これは永遠の真理である。

F138 私は常に死を覚悟している。

この覚悟を普通の人々は知らない。

しかし、（この）覚悟をした人には、（この世に常住する）争いがしずまる。

F139 この世のものを浄らかだと思いなして暮らし、（眼などの）感官を抑制せず、食事の節度を知らず、怠けて勤めない者は、悪魔にうちひしがれる。

——弱い樹木が風に倒されるように。

F140 この世のものを不浄であると思いなして暮らし、（眼などの）感官をよく抑制し、食事の節度を知り、信念あり、努め励む者は、悪魔にうちひしがれない。

——岩山が風にゆるがないように。

F141 まことではないものを、まことであると思なし、まことであるものを、まことではないと見なす人々は、あやまった思いにとらわれて、ついに真実（まこと）に達しない。

F142 まことであるものを、まことであるを知り、まことではないものを、まことではないと見なす人は、正しい思いにしたがって、ついに真実に達する。

F143 屋根を粗雑に葺いてある家には雨が漏れ入るように、心を修養していないならば、煩惱

が心に侵入する。

F144 屋根をよく葺いてある家には雨の漏れ入ることがないように、心をよく修養してあるならば、煩惱が侵入することはない。

F145 たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。

かれは道を実践する人の部類には入らない。

F146 たとえためになることを少ししか語らないにしても、心を治めるように、

法にしたがって正しく実践するように、

執着と怒りと迷妄と疑惑と慢心を離れるように、常に気をつけている人は、道を実践する人である。

## 第2節 さまざまな悪

### FS13 悪

F147 道に違（タゴ）うたことになじみ、道に順（シタガ）ったことにいそしまず、目的を捨てて快いことだけを取る人は、みずからの道に沿って進む者を羨むに至るであろう。

F148 善をなすのを急げ。悪から心を退けよ。善をなすのにのろのろしたら、心は悪事をたのしむ。

F149 人がもしも悪いことをしたならば、それを繰り返すな。悪事を心がけるな。悪が積み重なるのは苦しみである。

F150 人がもし善いことをしたならば、それを繰り返せ。善いことを心がけよ。善いことが積み重なるのは楽しみである。

F151 まだ悪い報いが熟さない間は、悪人でも幸運に遭うことがある。しかし悪の報いが熟したときは、悪人は災いに遭う。

F152 まだ善い報いが熟さない間は、善人でも災いに遭うことがある。しかし善の果報が熟したときは、善人は幸福（サイワイ）に遭う。

F153 「その報いは私には来ないであろう」と思って、悪を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされるのである。愚かな者は、水を少しずつでも集めるよう

に悪を積むならば、やがて災いに満たされる。

F154 「その報いはわたしには来ないであろう」と思って、善を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされる。気をつけている人は、水を少しずつでも集めるように善を積むならば、やがて福德に満たされる。

F155 同行する仲間が少ないのに多くの財を運ばねばならぬ商人が、危険な道を避けるように、また生きたいと願う人が毒を避けるように、人はもろもろの悪を避けよ。

F156 もしも手に傷が無いならば、その人は手で毒をとり去ることもできるであろう。傷の無い人に、毒は及ばない。悪をなさない人には、悪の及ぶことがない。

F157 汚れの無い人、清くて咎のない人をそこなう者がいるならば、その災いは、かえってその浅はかな人に至る。風にさからって細かい塵を投げると、(その人にもどって来る)ように。

F158 大空の中においても、大海の中においても、山の中の奥深いところに入っても、およそ世界のどこにいても、悪業から脱れることのできる場所はない。

F159 大空の中においても、大海の中においても、山の中の洞窟に入っても、およそ世界のどこにいても、死の脅威のない場所は無い。

#### F161 怒つ

F160 御者が馬をよく馴らすように、おのが感官の高ぶりを静め、汚れをなくせ。走る車をおさえるようにむらむらと起る怒りをおさえる人——その人をわれは御者とよぶ。他の人はただ手綱を手に行っているだけである。

23 F161 荒々しい言葉を言うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだ言葉は苦

痛である。報復が汝の身に至るであろう。

FIG2 壊れた鐘のように、声を荒げないならば、汝は安らぎに達している。汝はもはや怒り罵ることがないからである。

FIG3 怒りを制すことによって怒りに、善いことによって悪いことに、

わかち合うことによって物惜しみに、  
真実によって虚言の人に立ち向かわなくてはならない。

FIG4 アトウラたちは、お釈迦様に帰依した三人の長老に教えを請い求めましたが、十分に納得出来る教えを示されませんでした。彼らは不満を抱いて、ついに、お釈迦様の元を訪ね、今までの経緯を述べて、教えを請いました。そのアトウラたちにお釈迦様は、次のように語られました。

FIG5 アトウラよ。これは昔にも言うことであり、いまに始まることでもない。沈黙している者も非難され、多く語る者も非難され、すこしだけ語る者も非難される。世に非難されない者はいない。

FIG6 ただ誹られるだけの人、またただ褒められるだけの人は、過去にもいなかったし、未来にもいないであろう、現在にもいない。

FIG7 もしも心ある人が日に日に考察して、「この人は賢明であり、行いに欠点がなく、知慧と徳行とを身にそなえている。」と行って称讚するならば、

FIG8 その人を誰が非難し得るだろうか？ かれはジャンブーナダ河から得られる黄金でつくった金貨のようなものである。神々もかれを称讚する。梵天でさえもかれを称讚する。

FIG9 身体がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。身体について慎んでおれ。身体による悪

い行いをやめよ。

F170 言葉がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。言葉について慎んでおれ。言葉による悪い行いをやめよ。

F171 心がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。心について慎んでおれ。心による悪い行いをやめよ。

F172 落ち着いて思慮ある人は、いかなる時でも、身を慎み、ことばを慎み、心を慎しむ。このように彼らは実によく己れをまもっている。

### FS15 汚れ

F173 汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし汝には資糧（カテ）さえも存在しない。

F174 だから、自己のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをほらい、罪過がなければ、汝はもはや生と老いとに近づかないであろう。

F175 聡明な人は順次に少しずつ、一刹那ごとに、おのが汚れを除くべし、——鍛冶工が銀の汚れを除くように。

F176 鉄から起った錆が、それから起ったのに、鉄自身を損なうように、悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところにみちびく。

F177 読誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、身なりを怠るならば容色が汚れ、なおざりになるならば、努め励む人が汚れる。

F178 不品行は婦女の汚れである。もの惜しみは、恵み与える人の汚れである。悪事は、この世においてもかの世においても（つねに）汚れである。

F179 これらの汚れより、さらに根元的な汚れが、自己を覆う無明である。修行僧らよ、努め励み、慎むことにより、もろもろの汚れを順次捨て、ついには無明が消滅するのを見とどけよ。

F180 恥をしらず、鳥のように厚かましく、凶々しく、人を責め、大胆で、心のよごれた者は、生活し易い。

F181 恥を知り、常に清きをもとめ、執着を離れ、慎み深く、真理を見て清く暮す者は、生活し難い。

F182 不当に生きものを殺し、虚言（イツワリ）を語り、世間において与えられないものを取り、他人の妻を犯す人は、この世において自分の根本を掘りくずす人である。

F183 人よ。このように知れ、——慎みがないのは悪いことである。——貪り（執着）と不正とのゆえに汝が永く苦しみを受けることのないように。

F184 人は、信ずるところにしたがって、清き喜びにしたがって、正しく施し（布施）をなさなくてはならない。

施し（布施）に見返りを求めると汚れが増す。だから、人は施し（布施）に見返りを求めてはならない。

F185 正しくほどこされた食物や飲料に満足しない出家者は、昼も夜も心の安らぎを得ず、汚れが増す。

F186 愛欲に等しい火は存在しない。不利な骰（サイ）の目を投げたとしても、怒りに等しい不運は存在しない。迷いに等しい網は存在しない。執着に等しい河は存在しない。

F187 他人の過失は認識しやすく、自己の過失は認識し難い。心の汚れた人は他人の過失を糞殻のように吹き散らす。自分の過失は、隠してしまう。——狡猾な賭博師が不利な骰

(サイ)の目をかくしてしまおうように。

F188 他人の過失を探し求め、つねに怒りたける人は、心の汚れが増大する。その人は心の汚れの消滅から遠く隔っている。

F189 人が、ニルヴァーナを得ようとめざし、常に目ざめているように昼も夜も学び努めるならば、もろもろの汚れは消え失せる。

F190 心の汚れた人たちは汚れのあらわれを楽しむが、学び努める人たちは汚れのあらわれを楽しまない。

F191 造り出された現象が常住であることは有り得ない。真理をさとつた人々(ブツダ・真人)は、汚れがなくなつたので、動揺することがない。

#### FS16 執着と欲望

F192 恣(ホシイママ)のふるまいをする人には執着が蔓草(ツルクサ)のようにはびこる。林の中で猿が果実を探し求めるように、輪廻転生し、あちこちさまよう。

F193 この世において、執着のもとであるうずく汚れのなすがままである人は、もろもろの憂いが増大する。——雨が降ったあとにはビートルナ草がはびこるように。

F194 この世において如何ともし難いこのうずく心の汚れを断つたならば、憂いはその人から消え失せる。——水の滴が蓮華から落ちるように。

F195 欲の快樂から多くの執着が生じる。欲の快樂を離れたならば、執着が減る。

F196 心の汚れから憂いと恐れが生じる。心の汚れを離れたならば憂いと恐れは存在しない。

F197 さあ、皆さんに告げます。——ここに集まつた皆さんに幸あれ。執着の根(心の汚れ)を

掘れ。

(香しい)ウシーラ根「正しい教え」を求める人が(雑草の)ビーラナ草「悪魔の教え」を掘るように、また、葦が激流に砕かれるように、魔にしばしも砕かれてはならない。

F198 たとえ樹を切っても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、執着の根源となる潜勢力(心の汚れ)を滅ぼさなければ、執着による苦しみはくりかえし現われ出る。

F199 この世の中には、快いものに向って流れる激流があり、その流れは、執着をいなく人を漂わし去る。——その流れとは、まさしく在住する様々な欲である。

F200 人の快楽を求める執着は、はびこるもので、また心の汚れで潤される。実に人々は歓楽にふけり、楽しみをもとめて、生れと老衰を受ける。

F201 (愛欲の)流れは至るところに流れる。(欲情の)蔓草は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、知恵によってその根を断ち切れ。

F202 欲望への執着に駆り立てられた人々は、わなにかかった兎のように、ばたばたする。欲望になずみ、欲望の激流に束縛され、永い間繰り返す執着しては得られない苦悩を受ける。それ故に修行僧は、自己の執着を除き去れ。

F203 欲望の林から出ていながら、また欲望の林に身をゆだね、欲望の林から免れていながら、また欲望の林に向かって走る。その人を見よ！束縛から脱しているのに、また束縛に向かつて走る。

F204 鉄や木材や麻紐でつくられた枷を、ブツダや真人は堅固な縛とは呼ばない。

財や宝石や耳環・腕輪をやたらに欲しがること、むやみに家族に惹かれること、——それらが堅固な縛である、と彼らは呼ぶ。それらは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。

賢い人々は、これらへの執着を離れなくてはならない。

F205 欲望にならずにいる人々は、自らの執着により、激流に押し流される。——蜘蛛がみずから作った網にしたがって行くようなものである。思慮ある人々はこれを断ち切って、顧みることなく、すべての執着を捨てて、歩んで行く。

F206 田畑は雑草によって害（ソコナ）われ、この世の人々は、執着、怒り、誤った見解（迷妄）、疑惑、慢心によって、害（ソコナ）われる。

F207 あれこれ考えて心が乱れ、汚れにより心がはげしくうづくのに、心の汚れ（不浄）を浄らかだと見なす人には、執着がますます増大する。この人は実に束縛の絆を堅固たらしめる。

F208 あれこれ考えをしずめるのを楽しみ、常に心身の汚れ（不浄）を観察して心を治める人は、実に悪魔の束縛の絆を取り除き、断ち切るであろう。

F209 激流の中で、解脱（彼岸、ニルヴァーナ）を求める賢い人は享樂に害（ソコナ）われることがない。愚かな人は享樂のために害（ソコナ）われるが、享樂を執着するがゆえに、愚かな人は他人を害（ソコナ）うように自分も害（ソコナ）う。

F210 言葉で説き得ないもの（ニルヴァーナ）に達しようとする志を起し、意（オモイ）は満たされ、欲の激流に心の礙（サマタ）げられることのない人は、（流れを上る者）と呼ばれる。

F211 教えを説いて与えることはすべての贈与にまさり、教えの妙味はすべての味にまさり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまさる。執着を滅ぼすことは全ての苦しみにうち勝つ。

F212 偽りを語る人、あるいは自分でしておきながら「私はしませんでした。」と言う人、——この両者は死後には等しくなる、——来世では行ないの下劣な業を持った人々なのであるから。

F213 放逸で他人の妻になれ近づく者は、四つの事がらに遭遇する。——すなわち、禍をまねき、臥して楽しからず、第三に非難を受け、第四に悪しきところに墜ちる。

F214 禍をまねき、悪しきところに墜ち、相ともにおびえた男女の愉楽は少なく、王は重罰を課する。それ故に人は他人の妻になれ近づくな。

F215 その行ないがだらしなく、慎みが乱れ、清らかな行ないなるものもあやしげであるならば、大きな果報はやって来ない。

F216 悪いことをするよりは、何もしない方が良い。悪いことをすれば、後で悔いる。単に何かの行為をするよりは、善いことをする方が良い。なし終わって、後で悔いがない。

F217 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られているように、そのように自己を守れ。瞬時も空しく過ごすな。時を空しく過した人々は悪いところに墜ちて、苦しみ悩む。

F218 恥じなくてよいことを恥じ、恥ずべきことを恥じない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

F219 恐れなくてもよいことに恐れをいだき、恐れねばならぬことに恐れをいだかない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

F220 避けねばならぬことを避けなくてもよいと思ひ、避けてはならぬ(＝必ず為さねばならぬ)ことを避けてもよいと考える人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

F221 遠ざけるべきこと(＝罪)を遠ざけるべきであるを知り、遠ざけてはならぬ(＝必ず為さねばならぬ)ことを遠ざけてはならぬと考える人々は、正しい見解をいだいて、善いところにおもむく。

F222 汚れの無い人々は全き安らぎに入り輪廻を離れ、それ以外の人々は輪廻にとどまり、行いにより死後に赴く所が決まる。

### 第3節 さまざまな人

#### FS18 愚かな人

F223 眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。正しい真理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い。

F224 旅に出て、もしも自分よりもすぐれた者か、または自分にひとしい者に出会わなかったら、むしろきっぱりと独りで行け。愚かな者を道伴（づ）れにしてはならぬ。

F225 「わたしたちには子がある。わたしには財がある。」と違って愚かな者は悩む。しかしすでに自己が自分のものではない。ましてどうして子が自分のものであろうか。どうして財が自分のものであろうか。

F226 もしも愚者がみずから愚であると考えれば、すなわち賢者である。愚者でありながら、しかもみずから賢者だと思おうこそ、「愚者」だと言われる。

F227 愚かな者は生涯賢者に仕えても、真理を知ることが無い。匙が汁の味を知ることができないように。

F228 聡明な人は瞬時（またたき）のあいだ賢者に仕えても、ただちに真理を知る。——舌が汁の味をただちに知るように。

F229 あさはかな愚人どもは、自己に対して仇敵（かたき）に対するようふるまう。悪い行

いをして、苦い果実（このみ）をむすぶ。

F230 もしも或る行為をした後に、それを後悔して、顔に涙を流して泣きながら、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善くない。

F231 もしも或る行為をしたのちに、それを後悔しないで、嬉しく喜んで、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善い。

F232 愚かな者は、悪いことを行っても、その報いの現れないあいだは、それを蜜のように思わない。しかし、その罪の報いの現れたときには、苦悩を受ける。

F233 しかし、愚かな者は、悪い行ないをしておきながら、気がつかない。しかし浅はかな愚者は自分自身のしたことによって悩まされる。——あたかも、火がこの愚者を焼きこがすように。

F234 愚かなものは、真理をわきまえた人が得る功德と同じように、断食行により功德が得られると考える。

しかし、愚者の行う断食行に功德はない。

F235 悪事をして、その業は、しぼり立ての牛乳のように、すぐに固まることはない。（徐々に固まって熟する）その業は、灰に覆われた火のように、（徐々に）燃えて悩ましながら、愚者につきまとう。

F236 愚かな者に念慮（オモイ）が生じて、ついにその人には不利なことになってしまふ。その念慮はその人の好運（シアワセ）を滅ぼし、その人の頭を打ち砕く。

F237 「これは、わたしのしたことである。在家の人々も出家の人々も、ともにこのことを知れよ。およそなすべきこととなすべからざることについては、私の意に従え」——愚かな者はこのように思う。こうして欲求と高慢（たかぶり）とがたかまる。

F2338 愚かなバラモンや修行僧は、実にそぐわぬ虚しい尊敬を得ようと願うであろう。修行僧らのあいだでは上位を得ようとし、僧房にあっては権勢を得ようとし、他人の家に行つては供養を得ようと願うであろう。

### FS19 賢い人

F2339 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯める様に、賢者は自己を整え、心を治めよ。

F240 実に魂（自己）は心（自分）の主（あるじ）で、帰趨（よるべ）である。故に魂により心を治めよ。——商人が良い馬を調教するように。

F241 心をとどめている人々は努めはげむ。かれらは執着を遠ざける。彼らは、あの執着、この執着を捨てる。

F242 （おのが）罪過（ツミトガ）を指し示し過ちを告げてくれる聡明な人に会ったならば、その賢い人につき従え——隠してある財宝のありかを告げてくれる人につき従うように。そのような人につき従うならば、善いことがあり、悪いことは無い。

F243 悪い友と交わるな。卑しい人と交わるな。善い友と交われ。尊い人と交われ。

F244 高尚な人々は、どこにいても、執着することが無い。快樂を欲してしゃべることが無い。楽しいことに遭（あ）つても、賢者は動ずる色がない。

F245 一つの岩の塊りが風に揺るがないように、賢者は非難と賞賛とに動じない。

F246 その行ないが親切であれ。（何ものでも）わかち合え。善いことを実行せよ。そうすれば、喜びにみち、苦悩を減するであろう。

F247 道を説く賢い人は善人に愛せられ、悪人からは疎まれる。

F248 自分のためにも、他人のためにも、子を望んではならぬ。財をも国をも望んではならぬ。邪なしかたによって自己の繁栄を願うてはならぬ。

(道になかった) 行いあり、明かな智慧があり、真理にしたがつておれ。

F249 たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。「快樂の味は短くて苦痛である」と知るのが賢い人である。

F250 賢者は、悪いことがらを捨てて、善いことがらを行え。楽しみ難いことではあるが、孤独(ひとりい)のうちにも、喜びを求めよ。

F251 人間の身を受け、人生修行することは貴重で、無駄にしてはならない。

死ぬ運命にあると言われる人間は、実は、身体が死んでも、魂は連続的に存在する。ただ、もろもろのみ仏の出現したもうことは稀であり、よって、正しい教えを聞く機会も稀である。

F252 尊い人(≡ブツダ)は得がたい。かれはどこにでも生れるのではない。思慮深い人(≡ブツダ)の生れる家は、光り輝く。

F253 真理が正しく説かれたときに、真理にしたがう人々は、渡りがたい輪廻転生を超えて、安らぎにいたるであろう。

F254 真理を喜ぶ賢い人は、真理を聞き、正しく生活を送り安らかに臥す。その人の心は、深い澄んだ湖のように静かで清らかになる。

F255 大地のように慎み深く、整った門のように分別を保ち、汚れた泥がない深い湖のように心が清らかな、そのような境地にある人には、もはや生死の世は絶たれている。

F256 人々が多いが、安らぎ(解脱)に達する人々は少ない。他の(多くの)人々は輪廻転生をさまよっている。

F257 心の汚れが消え失せ解脱することは、空を体現してこの世の実相を認識することもあ  
る。この解脱者たちの行く路（足跡）は知り難い。——空飛ぶ鳥の迹の知りがたいように。  
F258 無相の体現によって解脱して、やすらいに帰した人——そのような人の心は静かである。  
ことばも静かである。行いも静かである。

F259 八正道により、心を正しくおさめ、執着なく貪りを捨てるのを喜び、煩惱を滅ぼし尽く  
して輝く人は、現世において全く束縛から解きほごされている。

F260 みずから恥じて自己を制し、良い馬が鞭を気につけないように、世の非難を気につけな  
い人が、この世に誰か居るだろうか？

賢い人よ、鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。  
正しい信仰、慎み（戒しめ）、努め、禅定により思念をこらし、真理を確かに知り、この  
少なからぬ苦しみを除けよ。そして、知恵と行ないを完成させよ。

F261 作られたもの——既存の信仰や神を軽信することなく、作られざるもの——法を知り、生  
死の絆が絶たれ、善悪の計らい、もろもろの欲求から離れた人、彼こそ実に最上の人、真  
人である。

#### F262 真人

F262 蓮葉の上の露のように、錐（キリ）の尖（サキ）の芥子ののように、緒の欲望に汚されない人、  
——その人を我は真人と呼ぶ。

F263 芥子粒が錐（キリ）の尖端から落ちたように、執着と怒りと高ぶりと隠し立てとが脱落し  
た人、——その人を我は真人と呼ぶ。

F264 への世の禍福いずれにも執着することなく、憂いなく、清らかな人、——その人を我は

真人と呼ぶ。

F265 こだわりあることなく、疑惑なく、不死の底に達した人、——その人を我は真人と呼ぶ。  
F266 現世を望まず、来世をも望まず、欲求がなくて、とらわれの無い人、——その人を我は真人と呼ぶ。

F267 すでにこの世において自分の苦しみの滅びたことを知り、重荷をおろし、とらわれの無い人、——その人を我は真人と呼ぶ。

F268 曇りのない月のように、清く、澄み、濁りがなくなった人、——その人を我は真人と呼ぶ。

F269 村にせよ、荒れ地にせよ、低地にせよ、平地にせよ、真人の住む土地は楽しい。

F270 真人は人のいない荒れ地でも楽しい。世人の楽しまないところにおいて、執着なき真人は楽しむであろう。かれらは快樂を求めないからである。

F271 あらゆる束縛の絆をのがれた真人は、憂いや悩みは存在せず、生きていながら人生の苦を終えたようになる。

F272 明らかな知慧の無い人には精神の安定統一が無い。

精神の安定統一していない人には明らかな知慧が無い。  
精神の安定統一と明らかな知慧とがそなわっている人は安らぎに帰す。

F273 執着をなくし欲望の激流を離れ、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、「大いなる知慧ある人」と呼ばれる。

F274 執着をなくし、さらに、汚れを滅ぼしつくした真人は、さどりの究極に達した人で、生存の矢を断ち切った人となる。

F275 現在、過去、未来の全ての汚れを離れよ。

その様な人を生存の彼岸に達したという。

その様な人は解脱していて、もはや生れと老いを受けることが無いであろう。そして、現在、過去、未来の全てのものを認識するであろう。

—その真人を我はブツダと呼ぶ。

F276 慎みを完成させ、塵汚れ(チリケガレ)なく、常に為すべきことをなし、解脱に達した真人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F277 この世の人々は、執着、怒り、誤った見解(迷妄)、疑惑、慢心によって害われる。

怒り、執着、誤った見解、疑惑、慢心ともども断ち切り、さらに、無明を滅ぼした真人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

#### F221 道を実践する人

F278 あらあらしく事がらを処理するからとて、公正な人ではない。義と不義との両者を見きわめる人、粗暴になることなく、きまりにしたがって、公正なしかたで他人を導く人は、正義を守る人であり、道を実践する人であり、賢い人であるといわれる。

F279 多く説くからとて、それゆえに賢明なのではない。心を落ち着けて、怨むことなく、恐れることのない人、——その人こそ賢明であって、道を実践する人である。

F280 多く説くからとて、それゆえに道を実践している人なのではない。たとえ教えを聞くことが少なくても、身をもって真理を見る人、怠って道からはずれることの無い人——その人こそ道を実践している人である。

F281 頭髮が白くなったからとて「長老」なのではない。ただ年をとっただけならば「空しく老いぼれた人」と言われる。

F282 誠あり、徳あり、慈しみがあつて、つつしみあり、みずからととのえ、汚れを除き、気をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。

F283 嫉み、吝嗇（りんしよくヶチ）、偽りを断ち、根絶やしにし、さらに、憎しみをのぞき、聡明である人、——かれこそ「端正な人」とよばれる。口先や美しい容貌では、「端正な人」とはならない。

F284 頭を剃ったからとて、戒めをまもらず、偽りを語る人は、出家者ではない。欲望と貪りにみちている人が、どうして出家者であろうか？

F285 他人に食を乞うからとて、それだけでは托鉢僧なのではない。汚らわしい行ないをしていゝならば、それは托鉢僧ではない。

F286 この世の福樂も罪惡も見極め、執着せず、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処しているならば、その人こそ托鉢僧である。

F287 ただ沈黙しているからとて、道を実践する人と思つてはならない。そのような中には、愚かに迷い無智なる人がたくさんいる。

F288 秤を手にもっているように、いみじきものを取り、もろもろの惡を除く賢者こそ道を実践する人なのである。この世にあつて善惡の兩者を（秤りにかけてはかるように）よく考える人こそ道を実践する人とよばれる。

F289 道を実践する人と呼ばれる人は、生きとし生けるものを無益に害わない。生きものを無益に害うのは、道を実践する人ではない。

F290 私は、解脱の樂しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけによつても、また博學によつても、また瞑想を体現しても、またひとり離れて臥すことによつても、得られないものである。道を実践する者達よ。汚れが消え失せない

限りは、油断するな。

FS22 仏弟子

F291 すべて悪しきことをなさず、善いことを行ない、自己の心を浄めること、——これが諸のみ仏の教えである。

F292 他を罵らず、害わず、慎んでおのれを守り、食事に関して(適当な)量を知り、適時念定(禪定)を行ない、心に関するに努め励む。——これがもろもろのみ仏の教えである。

F293 忍耐・堪忍は最上の苦行である。ニルヴァーナは最高のものであると、もろもろのみ仏は説きたまう。他人を害する人、悩ます人は仏弟子ではない。

F294 仏の教えを喜び、慈しみに住し、怠らずに励めば、悪因の形成が止み、安楽な、静けさの境地(ニルヴァーナ)に到達する。

F295 天上の快樂は楽しいものだが、仏弟子にとって、妄執の消滅はさらに楽しい。

F296 もろもろのみ仏の現われたまうのは楽しい。

正しい教えを説くのは楽しい。  
つどいが和合しているのは楽しい。  
和合している人々がいそしむのは楽しい。

F297 人々は恐怖にかられて、山々、林、園、樹木、靈樹など多くのものにたよろうとする。

F298 しかしこれは安らかなよりどころではない。これは最上のよりどころではない。それらのよりどころによつてはあらゆる苦惱から免れることはできない。

F299 四つの尊い真理の四諦が、安らかなよりどころであり、最上のよりどころであり、あらゆる苦惱から免れるよりどころである。

F300 この四つの尊い真理とは、(一)苦しみと、(二)苦しみの成り立ちと、(三)苦しみの超克(チヨウコク)と、(四)苦しみの終滅(オワリ)におもむく八つの尊い道(八聖道)である。

F301 仏弟子が、昼も夜も起きている間は、常に「仏、法、心、体、善」について念い続けければ、覚醒し、その後も常に覚醒が持続する。そこで、彼らは、念定(禪定)を楽しむであらう。

F302 利得に達する道もあり、安らぎに達する道もある。仏弟子はこのことわりを知って、榮譽を求めず、努め励め。

#### F323 修行僧

F303 裸の行も、髻に結うのも、身が泥にまみれるのも、断食も、露地に臥すのも、塵や泥を身に塗るのも、蹲って動かないのも、——疑いを離れていない人を浄めることはできない。

F304 修行僧は、身の装いはどうあらうとも、自己(魂)を整えて心を治めて、正しく、慎しみ深い行いを実行し、生きとし生けるものに対して(不当な)暴力を用いてはならない。

F305 この世において明らかな知恵を求める修行僧の初めのつとめは、  
怠らないで、  
感官に気をくばり、  
分限と足るを知り、  
戒め(慎み)を守り、  
浄らかに生きる善い友とつき合う、  
ことである。

41 F306 正しく覚った人(≡み仏)の説かれた教えを、はっきりと学び得たなら、教示した人が、いかなる人であらうとも、その人を恭しく敬礼しつつ、その師に頼ることなく、常に自分

で考え判断する自立した心を養え。

F307 自分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得ることができない。

F308 修行僧は、怠ることなく清く生き、自分の得たものをが少なくても、それを軽んじない。

F309 ↓F311の後に移動する。

F310 修行僧は、眼について、耳について、鼻について、舌について、身について、言葉について、心について慎しもう。

F311 修行僧は、あらゆることについて慎しめば、すべての苦しみから脱れる。

F312 修行僧が、心が浮わつくことなく、言葉をつつしみ、思慮して語り、事実と真理とを明らかにするならば、その人の説くところはやさしく甘美になる。

F313 みずから自分を励ませ。みずから自分を反省せよ。修行僧よ。心を護り、正しい念いをもてば、汝は安楽に住するであろう。

F314 愛好するものから心を遠ざけることは、修行僧にとって必要なことである。

F315 修行僧よ。この舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであろう。貪りと怒りを断ち、ジャスマミンの花が花びらを捨て落とすように、貪りと怒りを捨て去れば、汝は安らぎにおもむくであろう。

F316 まず、五下分結を断ち、次に、五上分結を捨てよ。

さらに、信、精進、念、定、慧による五つ（のはたらき）を修めよ。

そうすれば、修行僧は、五つの汚れ（貪り、怒り、迷妄、高慢、疑惑）を超え、激流を渡った者とよばれる。

F317 修行僧よ。瞑想せよ。なおざりになるな。汝の心を欲情の対象に向けるな。なおざりのゆえに鉄丸を呑むな。(灼熱した鉄丸で)焼かれるときに、「これは苦しい！」といって泣き叫ぶな。

F318 戒律を守らず、自ら慎むことがないのに国の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうほうがましだ。

F319 茅草でも、とらえ方を誤ると、手のひらを切るように、修行僧の行も、誤っておこなうと、地獄にひきずりおろす。

F320 もしも為すべきことであるならば、それを為すべきである。それを断乎として実行せよ。行ないの乱れた修行者はいつそう多く塵をまき散らす。

F321 修行僧が念と定の修行のために、人のいない空家に入って心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。

この修行により、個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを、徐々に正しく理解する。それにつれ、個人存在の不死のことわりを知り、それによる喜びを、彼は体得する。

F322 世間から離れた静けさの中で、念いを静め、禅定に専中している修行僧は、正しいさとりを開く。神々でさえもその人を羨む。

F323 真理を喜び、真理を楽しみ、真理をよく知り分けて、真理にしたがっている修行僧は、正しいことわりから墜落することがない。

F324 修行僧が、身も静か、語(ことば)も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享楽物を吐きすてたならば、バラモンと呼ばれる。

F325 名称とかたちについて「わがもの」という想いが全く存在しない、何ものも無いからと

て憂えることの無い修行僧は、バラモンと呼ばれる。

F326 たとい年の若い修行僧でも、仏の道にいそしむならば、雲を離れた月のように、この世を照らす。

### F324 バラモン

F327 敵意ある者どもの間にあつて敵意なく、暴力を用いる者どもの間にあつて恐れず立ち向かい、執着する者どもの間にあつて執着しない人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

F328 バラモンよ。流れを断て。勇敢であれ。諸の欲望を去れ。諸の現象の生成と消滅を知つて、作られざるもの——法を知る者であれ。

F329 罪がないのに罵られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛き人、——その人をわれはバラモンと呼ぶ。

F330 出家して修行し、この世の欲望の激流を超え、執着の尽きた人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

F331 出家して修行し、心をよく治めて、心の汚れの尽きた人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

F332 バラモンを打つな。バラモンは打つ人に対して怒りだけを放つな。バラモンを打つものには禍がある。しかしただ怒るだけのバラモンにはさらに禍がある。

F333 身なりによつてバラモンなのではない。氏姓によつてバラモンなのでもない。生れによつてバラモンなのでもない。真理と理法とをまもる人は、安樂である。その人こそ(真の)バラモンなのである。

F334 袈裟を頭から纏っていても、性質(タチ)が悪く、つつしみのない者が多い。かれら悪人

は、悪いふるまいによって、悪いところに生まれる。

F335 愚者よ。バラモンの身なりだけ整えて、何になるのだ。汝は内に密林(≡汚れ)を蔵して、外側だけを飾る。

F336 粗末な身なりで、痩せて、血管があらわれていようとも、寂しい場所で一人で瞑想に専念する人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

F337 われは、(バラモン女の)胎から生れ(バラモンの)母から生れた人をバラモンと呼ぶのではない。この人は『君よ。』といって呼びかける者」といわれる。かれは何か所有物の思いにとらわれている。無一物であっても執着のない人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

F338 在家者・出家者のいずれとも不要に交らず、住居にこだわらずに修行し、欲の少ない人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

F339 強くあるいは弱い生きものに対して暴力を加えることなく、無益な殺生を行うことも、行わせることもない人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

F340 この世において、長かろうと短かろうと、微細であろうとも粗大であろうとも、浄かるうとも不浄であろうとも、すべて与えられていない物を取らない人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

F341 粗野ならず、ことがらをはっきりと伝える真実のことばを発し、ことばによって何人の心を害する意のない人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

F309 身にも、言葉にも、心にも、悪い事を為さず、(この)三つのところについて慎んでいる人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。(ただし、もとはF309)

45 F342 悪を静め、瞑想と慎みが完成したのでバラモンと呼ばれ、正しい教えのもとで出家し努

め励むので、修行僧と呼ばれる。

F343 バラモンが、瞑想と智慧を得ることについて彼岸に達した(＝瞑想を完成する)ならば、その人はよく知る人であるので、その人の束縛はすべて消え失せるであろう。

F344 慎みと瞑想を完成させ、汚れを消滅させて最後の身体に達したバラモン、——その人をわれはブツダと呼ぶ。

F345 彼岸(カナタノキシ)もなく、此岸(コナタノキシ)もなく、恐れもなく、束縛もないバラモン、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F346 念い静かで、塵垢(チリケガレ)、為すべきことをなしとげ、最高の目的である解脱に達した人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

#### F325 ブツダ

F347 ブツダは全てに打ち勝ち、全てを知り、あらゆることに関して汚されていない。全ての執着を捨てて、汚れが尽き、解脱している。自らさとしたのであって、誰を(師と)呼ぼうか。

F348 ブツダの勝利は敗れることがない。

ブツダの境地はひろくて涯しがない。

足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？

F349 誘なうために網のようにならみつき執着をなす妄執は、その人にはどこにも存在しない。ブツダの境地は、ひろくて涯しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？

F350 太陽は昼にかがやき、月は夜に照し、武士は鎧を着てかがやき、バラモンは瞑想に専念

してかがやく。しかしブツダはつねに威力もて昼夜に輝く。

F351 明らかな智慧が深く、聡明で、種々の道に通達し、最後の目的を達した人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F352 すべての束縛を断ち切り、恐れることなく、執着を超越して、とらわれることの無い人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F353 この障害・険道・輪廻(サマヨイ)・迷妄を超えて、渡り終わって彼岸に達し、瞑想・熟考し、興奮することなく、疑惑なく、執着することなくて、心安らかな人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F354 人間の絆を越え、天界の絆を越え、すべての絆を越えた人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F355 「快樂」と「不快」にとらわれることなく、清らかに涼しく、全世界にうち勝った英雄、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F356 生きとし生ける者の生死をすべて知り、執着なく、良く生きし人、覚った人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F357 神々も天の伎楽神(ガンダルヴァ)たちも人間もその行方を知り得ない人、煩惱の汚れを滅ぼしつくした人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F358 牡牛のように雄々しく、気高く、英雄・勝利者・汚れの無い人・解脱者——その人を我はブツダと呼ぶ。

F359 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を滅ぼしつくすに至って、直観智を完成した聖者、完成すべきことをすべて完成した人、——その人を我はブツダと呼ぶ。